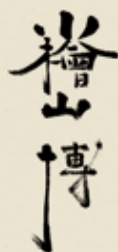
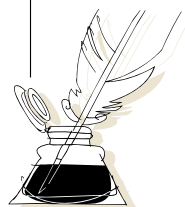


人生讃歌



月が見える理髪店



最近ぼくは髪の毛を自宅で妻に切ってもらっている。出歩くことが少なくなっただけか、髪なんかどうでもいいという無精な気分もある。思えばぼくの調髪もいろいろ変化してきた。生まれてから中学三年までは丸坊主だったので、父が家でバリカンで刈ってくれた。父は自分の妻と六人の子供の頭と顔は、すべてバリカンと西洋剃刀で処理していた。父は小学五年までしか学校へ行けてなかったが馬追、樵、大工、農作業、料理と何でもこなし、注射器具一式も持っていて、家族の風邪や腹痛、馬や豚の病気に対応していた。市街から二十キロ近くの山奥に住んでいたから、だいたいの薬品や道具は所持していた。

ぼくは高校の三年間、寄宿舎にいたが丸坊主だったうえおカネがないので理髪店へ行けず、寮生同士でバリカンで刈り合った。つまり生まれてから十八年間、一度も理髪店というところへ行ったことがなく、理髪店はおカネもちの行くところだと考えていた。

会社勤めしていた十九歳から六十七歳までの約五十年間も、会社内にあった非常に安い理髪店に通った。調髪して顔を剃ってもらっても街の店の三分の一くらいの値段で、そこで浮いたぶん、酒代や本代に回せてありがたかった。もちろん二十代

ころの、気になる女友達に会ったり好みの女性がいる酒場へ行くときは、高いおカネを払って街の理髪店でリーゼントなんかにし、めかして行つたが何の効果もなかった。

七十歳過ぎてからは街の理髪店へ行くのが億劫になつたうへ、髪も髭もどうでもよくなった。しかし妻に「まわりの人が不快になる」と言われ、仕方なくたまに妻に調髪してもらう状況である。そういうとき、ふと思ひ出すことがある。

★

二十五年ほど前になる。ぼくが雑誌の取材で、ガス爆発事故などで閉山した北海道の炭鉱都市をたずねたときのことである。以前、三万人もいたその市が炭鉱閉山つづきで人口が六千数百人という小さい市になってしまっていた。その地で六十三年間も理髪店をつづけているという、七十七歳と七十二歳のTさん夫妻に会うためだった。客が一日に二人か三人しかこないまで減つたのに、なぜ店を閉めないのか聞きたかったからだ。

訪問してびっくりした。昔の古い炭鉱長屋の茶の間を使つた理髪店で、店名もなく看板もなかった。知らない人には古い空き家に見えた気がする。

Tさんは小樽で九人きょうだいの長男に生まれた。母親のすすめでいまの奥さんと結婚、景気のよかった炭鉱街のその市へきて理髪店を開業するが、ある炭鉱の閉山で客が減り、小樽へ戻って理髪店を考えたが銀行がおカネを貸してくれない。そのとき近所の人々が熱心に引きとめてくれたためその市で店を続けた。奥さんも理容師の免許をとった。

★

ぼくが取材中に店へ調髪にきた七十五歳のKさんという客は、四十八年間、この店へ通つていふと言った。若いときは月に二回、いまは月に一回で、これまでざっと八百回は通つてきたと笑った。

Tさん夫妻は月に一度、市の老人ホームの人の理髪にも出かけてゆくという。Tさんの二人の子供のうち姉のほうは北大看護学校を出て医師と結婚、現在大阪にいる。弟のほうは大阪外語大学を出て大阪で勤めているという。

Tさんは「二人の子供らが店やめて大阪へこいつて言うけど、私ら少ないお客さんだけど昔からの人だから、私たちの勝手に店やめるなんてことできませんよ。申しわけなくて」と言う。奥さんは「お客さんが困ると思うと、とてもやめられませんか」とうなずいた。

★



挿絵/中江潤一

客のKさんが「この店へくる客は俺もふくめて、ほとんどがこの店の大将と奥さんに自分の話を聞いてもらいたいんですよ。俺なんか昔、女房と別れ話になったとき、こへきて長々と愚痴言つて、理髪しないで帰ったこともあったから、悪いことしちゃったよなあ」と笑った。そして、いまでは客とTさん夫妻は兄弟か親戚以上の付き合いで、この店は地域の人々の社交場なんですとKさんが言った。

Tさんも「こへは遊びにきてくれればいいんだよ。客商売なんてのは、けっきょくお客さんとの親戚づき合いじゃないかって思うんでね。店やつてると月に二回くるお客さんの顔を見るのが楽しみでね。あの人、元氣になったかなあ。あの人いつきてくれるのかなあつて待ち遠しくてね。商売と関係なく、そう思うんだ」と言った。

横で奥さんが「お客さんこへきて、仕事、失敗しちゃったとかカネに困つてるとか、体調が悪いとか話すことで気持ちがお楽になつて帰つていくみたいなの。理髪はついでみたいだから面白い」と笑う。

★

ぼくが帰ろうと玄関へ向かいかけると、奥さんが天井を見上げて「見て、天井に穴あいてるでしょ。天気の良い夜なんか、あそこからお月さんが見えるの。理髪椅子にあお向けに座つたお客さんが、あの破れた屋根の天井穴からお月さんを見て『こりゃ、たまげた』つて喜ぶのさ」と笑った。

★

ぼくは外へ出て歩きながら空を見上げた。いまだき二人しかこない客のために、理髪店をやめたらその人が困るだろうからやめられないと本気で思っている人がいるという衝撃で、ぼくは呆然としていた。

①